焼野小学校　校長室だより

やけのそよ風

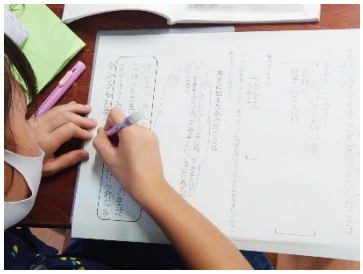
No.16
令和４年９月 21 日
大阪市立焼野小学校
校長　川辺　智久

「一つの花」(4年生 国語科の学習より)

本校では、子どもたちの言語能力の育成や、教員の授業力向上をめざして「文章で表現する力をつける」をテーマとして国語科の実践研究に取り組んでいます。９月 14 日には「授業研究会」として、全教員で４年生の国語科「一つの花」の授業を参観し、より効果的な指導・支援を行うためにはどのような工夫ができるのか討議したり、市教育センターの講師先生に授業改善に向けて助言をいただいたりしました。

「一つの花」は、今西祐行が 1975 年に発表した文学作品で、題名の意味を考えることを通して、戦時中という厳しい時代を生きた人々の気持ちや願い、家族の絆を深く味わうことができる教材です。この日の授業では、第４場面の内容を読み取り、お父さんがゆみ子に伝えたかった思いについて考えました。***【・・・駅でお父さんの出征を見送る「ゆみ子」とお母さん。いざ出発というときに、ゆみ子が「一つだけ、一つだけ。」と言って泣き出します。お父さんは、ホームのはしっぽ(原文ママ)に、わすれられたようにさいていたコスモスの花を見つけ、「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう…。」といって、わたします・・・。】***

ゆみ子にコスモスを手渡したとき、お父さんが伝えたかったことは何なのか。子どもたちは次のように考えました。



- この一輪のコスモスで幸せになれたらいいな。これが最後かも知れないから。
- そのコスモスの花、大切にするんだよ。わすれられたようにさいていたから、ゆみ子がコスモスを育てるんだよ。大きくなったらいい子にするんだよ。
- この一輪のコスモスを大事にしてね。もっとあげたかったけど、これだけでごめん。ずっと幸せでいてほしい。元気でいてね。
- お父さんがいなくても、大きくなったら幸せで、元気で、戦争がないような生活を送ってね。ありがとう。
- これからもずっと、どんなことがあってもこのコスモスのように明るく元気な子に育ってほしい。
- ゆみ子、ごめんね。本当ならいっぱいごはんを食べさせたり、ふつうの生活をさせてあげたいのに、してあげられなくて。ゆみ子もお母さんも今までありがとう。

学習に取組む子どもたちの姿は真剣そのものでした。お父さんの思いを一生懸命考え、しっかりとワークシートに記し、意見を交流することができました。ワークシートの記述から「親子の愛情」「戦争の悲惨さ」「困難に負けずたくましく生きることの大切さ」に子どもたちが気付いていることがわかります。

食べるものにさえ困窮する当時の人にとって、コスモスの花は忘れられたような存在だったことでしょう。同時に、決して高価ではないコスモスの花のように、「一人一人の命の大切さ」も忘れられてしまっているような世の中だったのかも知れません。お父さんの**「一つだけのお花、大事にするんだよう…。」**の言葉には、１輪のコスモスに託した「かけがえのない命を大切にしてほしい」という願いがこめられているのではないでしょうか。人間の心の根本にある「大切なもの」は戦争でも奪うことができない・・・この作品には、そんなメッセージがこめられているように思います。

世界では、今でも戦争や紛争により多くの人の命が失われています。日本の小学生と同じ年齢の子どもたちが銃を持って戦っている国もあります。家族を別れ別れにしたり、幼い子どもまで巻き込んだりもします。戦争は、悲しいことに人間が起こすものです。しかし、戦争を止めることができるのも人間です。これからの未来を担う子どもたちが、「戦争」のない平和な未来をつくる大人に成長することを願っています。

※「校長室だより」カラー版は、本校ホームページ「配布文書」にアップしています。